

難しい文献の読み方について

～難解な文章ほど、基本的な読み方をしてみよう～

——大学での勉強は、難しい文献に挑戦しなければならないことが多いです...

学術文献、専門書、研究書、哲学書、理論書など、長くて分厚い本...講義で紹介されたり、ゼミで扱ったり、レポートの題材に指定されたり、あるいは興味を持ってしまったりと、様々ありますが、こうした文献は、やはり難解で読みにくいです。

難解だからと言って、難しい文献を諦めるのは非常に勿体無いことです！

この資料では、大学生活において必ず直面するそうした状況に、それを乗り越えるヒントを提示することを目的に、“基本的な本の読み方”について説明します。

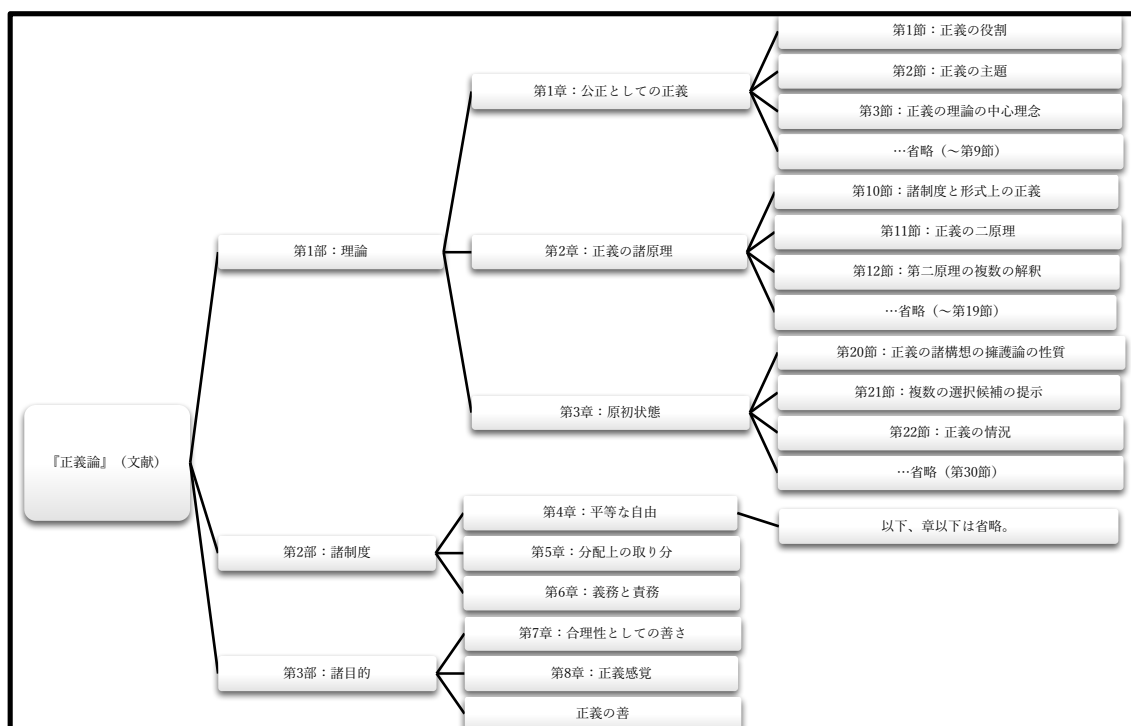
(※以下、主に川崎修、「(いまさら)本の読み方について」、立教大学法学会編、『法学周辺』、53号、2022年を参考に、この資料を作成しています。)

(1)：本の構造を理解しよう——目次の確認

→どのような本にでも、必ず目次があります。目次が詳しく書かれているものもあれば、あまり細分化されずに大きな括りしか提示していないものもありますが、とにかく目次を見ると、「その本で一体“何の話”をしているのか」が具体的に見えてきます。

→本、もしくはある程度長い文章というのは、ただ文字や文が並べられているわけではなく、構造を持っています。その“大きな”構造を一目で理解できるのが、目次になります。

以下の図（次ページ）は、目次のイメージになります。構図が見やすい文献として、ジョン・ロールズという20世紀における著名な政治哲学者の『正義論』という文献を例に挙げています。文献情報は、図の下に記載してあります。



※ジョン・ロールズ著 (川本隆史・福間聡・神島裕子 共訳)、『正義論 改訂版』、紀伊国屋書店、2010年の目次より筆者作成。

→このように、目次を見ると、全体がどのような話になっていて、その中でまずは何の話から始められていて、その話の次にどのような話に来て、最後に何の話で締め括られているのか、という本全体の話の流れがわかるようになります。上の例で言えば、第1部の理論というテーマにおいては第1章では「正義」とは何か？という話から始められており、第2章ではその「正義」の原理について論じられる、という流れになっていることがわかります。

→また、上の図の例のように小見出しが充実している目次だと、それぞれの章で論じられる話の中で、その中のそれぞれの節では一体どのような話をしているのか、もしくはどういった展開があるのかなどが、ひとまず構造として分かります。

まとめると、まずは目次を確認することが難しい文献を攻略するためのポイントです！

：目次を見て、全体の構造を把握することが、本を読む前の準備作業です。

難解な文献でも、内容のおおよその見当が付いていないのと付いているのでは、理解度が大きく変わります。

(2)：文章のまとまりを理解しよう——段落ごとの内容を抑える読み方

→(1)の内容とも重なりますが、繰り返し強調しておく、本やそこに書き記されている文章は構造を持っています。(1)では目次を見て、大きな構造を捉えることを説明しましたが、(2)では、本文を読んでいく中で、実際の文章の構造を掴むことを説明します。

→例えば、(1)にも書いた通り、「何の話から始められていて、その話の次にどのような話をしていて、最後にどのような話で締め括られているのか」ですが、ここでは、それぞれの「話」の中の、もう少し小さな構造を捉える作業を説明することになります。

→小学校や中学校、高校の国語の授業で、文章題に取り組むときに、「段落番号を振ってみる」という作業をしたことがないでしょうか？そして、その上で①段落目はどのような内容で、②段落目はどのような内容で、③段落目は...という作業を、したことがありますか？また、①②/③④⑤/⑥⑦という様に、段落を「導入」・「本論」・「結論」のような形でまとめたことはありませんか？

→実は、段落番号を振り、それぞれの段落で一体何の話をしているかについて考えることを、大学で扱う文献でもやってみると、難解で話の内容が見えにくい文献でも、スッと構造が分かるようになります。小学校や中学校、高校の国語で習った通り、基本的には一つの段落には一つのトピックについて書かれてあります。そのトピックを掴むことが文章を理解する上では重要で、その段落で言われているトピックを掴むと、その前後の段落や、その節の中でのその段落の位置付けに関しても理解できるようになります。

まとめると、段落ごとの意味を把握することが難解な文章を理解するポイントです！

：具体的には、各段落に番号を振り、一言から一文くらいのタイトルをつけてみる、というところに取り組んでも良いかもしれません。(段落ごとに番号を振り、それぞれタイトルをつける作業は、レジюмеなどを作成する際にもとても便利です！)

：なお、これを意識すると、逆に「どこが分からないか」が分かるようになります。というのも、一言から一文でタイトルをつける、というのは要するに要約の作業ですが、こちらも小学校や中学校、高校の国語の授業で習った通り、その段落をきちんと理解していないと要約することは難しく、なかなかできません。各段落にタイトルをつけていくという作業は、読んでいく中で自分はどこまで理解できていて、どこからはわかっていないのかを確認する作業でもあります。

(3)：一文一文の意味を正確に理解しよう——基本は、「主語」と「述語」

→さて、ここまで目次、各段落、と本における大きな構造から順に読み方のポイントを説明してきました。最後に、一文一文の読み方です。難解な内容の文献ほど、読んでいてたまに「意味が分からない...」や「日本語は（当然ながら）読めるけど、意味として理解ができない...」という箇所があると思います。また、そういう箇所でそのような難解な文献を読むことに挫折してしまう人も多いように感じます。それは非常に勿体無いことです。

→このような時には、こちらも(2)と同様に、小学校や中学校、高校の国語の授業で習った通りに、「主語」や「述語」をしっかりと確認し、その一文は、端的に言ったら一体何を言いたいのかを把握して試みることが有効です。長い文ほど、主語や述語を見失いがちですが、そこをしっかりと抑えることで、「誰が」（あるいは「何が」）、「どうした」（あるいは「～だ」）という基本的な意味を掴みやすいです。

まとめると、難解な文章ほど主語-述語の関係から一文の構造を理解することが重要です！

：何行にもわたるような長い文で、特に意識してみてください。英語の文法と一緒に、and（「～、そして、～」など）や、or（「～もしくは、～」など）にも注意しつつ、文の構造を理解してみましょう。

(4)：分からないことは分からないという姿勢

→最後に、難しい文献を読む上でのその他の注意事項を紹介します。

まず念頭に置いておくべきこととして、分からないものは分からないということです。
ただ、本や文章とは、全てを理解していなくても、読めます。これまでの話にもあった通り、分からない箇所に直面し、その本を読むことに挫折してしまうことが一番勿体無いです。

→最後に、難しい文献に取り組む際の、補助となるテクニックを紹介しておきます。

・辞典や辞書、インターネットでの情報検索。

…分からないことは調べてみましょう。気軽に辞典や辞書を引いてみましょう。

分野によっては、専門の辞書を引いてみるのも有効です。

…立教図書館のオンラインデータベースには、JapanKnowledge Lib（URL は下記）があります。こちらも活用し、分からないことはなんでも調べてみてください！

JapanKnowledge Lib：<https://japanknowledge.com/library/>

- ・他の文献にもあたってみる。
 - …辞典などで調べても分からないことは、もしかするともう少し手を広げてみなければ分からないかもしれません。例えば、同じ著者の他の文献、その当の文献について解説をしている文献などに当たってみると、ヒントがあるかもしれません。特に外国語から日本語に翻訳された文献だと、場合によっては原著を確認した方が分かりやすいかもしれません。
- ・教員への質問。
 - …授業やゼミで扱う文献は特に、また自主的に読んでいる文献でも、その道の第一人者に聞くのが一番です。大学という環境を活用しましょう！

以上のポイントを念頭に、難しい文献にひるまず、是非挑戦してみてください！

参考文献一覧：

川崎修、「(いまさら)本の読み方について」、立教大学法学会編、『法学周辺』、53号、2022年。

ジョン・ロールズ著（川本隆史・福間聡・神島裕子 共訳）、『正義論 改訂版』、紀伊国屋書店、2010年。

M.J.アドラー/ C.V.ドーレン共著（外山滋比古・榎未知子 共訳）、『本を読む本』、講談社、1997年。